

C-08-3

開口を下顎反射亢進抑制に利用し，徐々に経口摂取が可能となった一例

¹木沢記念病院中部療護センター

²岐阜大学大学院医学系研究科神経統御学講座脳神経外科学分野

○豊島義哉^{1,2}，酒向圭介¹，奥村由香¹，辻井知香子¹，平林美樹¹，田中秀美¹
奥村歩¹，篠田淳¹，岩間亨²

【はじめに】当センターの患者は，意識障害による随意的嚥下の困難，筋緊張及び下顎反射亢進，長期非経口による嚥下諸筋群の萎縮と筋力低下などによる認知期から咽頭期に至る重度嚥下障害の方が多い。今回，外部刺激に対して過敏で全身の筋緊張が亢進する患者に，綿棒を口に近づけると開口することを下顎反射亢進の抑制に利用した嚥下パターン練習が定着し，徐々に経口摂取が可能になった症例を経験したので報告する。【症例・経過】脳挫傷，彌慢性軸索損傷（平成17年7月受傷），50歳代，男性。平成18年2月当院入院。遷延性意識障害に関する広南スコアは67点（最重症70点），四肢麻痺，嚥下造影検査（平成18年7月）：スライス状ゼリーは一部誤嚥あり，クラッシュ状は誤嚥なし。嚥下訓練は，口腔内脱感作，飴による唾液嚥下，クラッシュ状，スライス状ゼリーへと進めた。【結果】下顎反射が亢進すると，舌筋群の緊張も亢進し，後舌部と口蓋で口腔が閉鎖され，唾液のような液体以外は咽頭へ送り込む事ができなかった。その後，綿棒を口に近づけると開口するようになり，開口すると後舌部が弛緩し，スライス状のゼリーでも咽頭へ送り込めるようになり，徐々に経口摂取が可能となった。18年7月は浮動的で1スプーンに対し，嚥下するまでに1～5分を要していたが，19年2月頃（広南スコア63点）から，長い時でも10～15秒程度で嚥下できるようになり，嚥下パターンが定着してきた。【まとめ】このパターン練習は，口元に物が近づくと開口するといった反射，本能動作を誘発するレベルであるが，今後，上位の随意運動である従命による嚥下や注視によるゼリーの二者択一などに繋げていきたい。